

第2問 次の文章を読み、以下の問1と問2に答えなさい。

芸術的なユーモア表現には、社会の見方を変更するよう促す力が宿っている。日本のアーティスト集団 Chim ↑ Pom は、こうした芸術におけるユーモアの活用を積極的に推し進めてきた。一例を挙げるならば、彼らの初期作品に『アイムボカン』（2007年）がある。これは、女性メンバーのエリイが自分をセレブと捉え、それならば私も故ダイアナ元妃がしたように地雷撤去を実施しようという無茶なアイデアから始まったプロジェクトで、カンボジアに滞在し、地元の若者たちと作品制作を行い、最終的には地雷撤去の際の火薬を用いて作品やエリイの私物（ルイ・ヴィトンのバッグ、プリクラ帳など）を爆破した。さらにそれら爆破の跡を残したオブジェ群を日本に持ち帰ってオークションにかけ、集まった収益をカンボジアに寄付した。この一連のプロジェクトは、当時の「自己責任」が声高に求められ、そのせいで自主規制に走る若者の閉塞感を「なぞろうとした」ものと Chim ↑ Pom は説明している。「個人の勇氣はいいように社会に去勢されていく。それをメッセージとして言うのは簡単ですが、僕らはそれを「勝手に行動すること」で検証したかった」。また、こんなことも彼らは言っている。

「地雷撤去」と言うと、慈善事業で「救う」べき悲劇の物語を連想しますが、現地の人たちは地雷を爆破するときに楽しんでいるふしもあります。つらくて苦しいだけではやっていられないわけで、彼らには笑いやユーモアが必要です。だから僕らのイベントは彼らにとってはレクリエーションでした。

「救う」べき「悲劇」と想像していたらカンボジアの人々は地雷の爆破を「楽しんで」いたとは、拍子抜けの感がある。まさにユーモアについてフロイトが述べた感情消費の節約を物語るエピソードである。先入見で判断しがちなところをワイルドな行動力で現場（状況）へと入り込んでゆき、先入見の範疇では想像不可能な地点へと到達してしまう。それは、実に Chim ↑ Pom らしい戦略であり、ユーモア特有の前向きさに満ちみちている。（中略）

「芸術実行犯」の一人であるゼウスは、もっとも戦略的でユーモアの要素の濃い作家である。フランスのアーティストであるゼウスは2002年にベルリンで『ヴィジュアル・キッドナップ（視覚の誘拐）』というパフォーマンスを遂行した。そこで彼は、ベルリンのホテルの屋上に掲げられたコーヒーブランド、ラバツァ社の巨大なポスターにカッターを差し込み、女性モデルの姿を切り抜くと、その「モデル」を近くのギャラリーに「誘拐」したのである。翌日には警察がギャラリーに現れたものの、ゼウスはスーツケースに「人質」をしまっけてベルリンから逃げた後であった。潜伏しながら、「人質」の指を切断してラバツァ社に送りつけて身代金を要求したり、「人質」の処刑に賛成するか否かを問う投票を実施したりと、彼は「誘拐」行為を継続させた。最終的には、ラバツァ社はゼウスの誘いに乗り、最後の表現の場となったパレ・ド・トーキョーに小切手を送ったのである。

逮捕すれすれの危険を冒しながらゼウスが実行したのは、広告というものが公衆に購買意欲に向けたプレッシャーを与え、人々の関心を奪う振る舞いに「人質」的状況を見て取り、それへの対抗策として広告モデルを逆に「人質」にすることであった。また——これがより重要なのであるが——、ゼウスのこうした異議申し立ては、自分の仕組みだゲームに相手を巻き込み、相手に自分のゲームのプレイヤーを演じさせ、そうすることで、ゼウスとラバツァ社の双方によるいわばユーモア精神の共有を引き出した。ラバツァ社が事件発覚後、すぐに警察に訴えたのは、私たちが通常とる法的な振る舞いであろう。ただし、ラバツァ社はそれをただ押し通すことに終始せず、態度を変更していった。一方がおかしなことをけしかけ、もう一方がそのおかしさに乗っかるというとても稀有な出来事が起きたのである。（中略）

Chim ↑ Pom はこの出来事についてこう述べている。「人間の行動をすべて法律や倫理でぶった切るのではなく、なかばジョークによってお互いのユーモアや寛容度をテストし合う。そうやってジョークが通じる新しい社会を生み出していく。「戦争」ではなく、ガチにコミュニケーションをとろうとするからこそ、ユーモアが欠かせない。ただのフラストレーションの発散や落書きと違い、広告主もユーモアによって試されるわけです」。

Chim ↑ Pom によれば、ゼウスの行いは「ガチにコミュニケーションをとろうとする」ものである。法や倫理に訴えるのではなく、また暴力的手段で押しつぶすのではなく、相手の投げかけに乗っかってみる。そして、その乗っかる行為は「テスト」を含んでいるという指摘も面白い。アーティストは過激なパフォーマンスを実行に移すことで、社会に「ユーモアや寛容度」があるかを試しているというのである。ユーモアは適当にごまかすことのできない「ガチ」のコミュニケーションへと人々を巻き込んでゆくのであり、コミュニケーションに巻き込まれた人々を「テスト」するのである。それに対して「戦争」という手段は、そうした「ガチ」の出会いを強引な暴力によって粉碎してしまう。

（木村覚『笑いの哲学』講談社、2020年より作成）

問1 筆者が述べる芸術的なユーモア表現が社会にもたらす可能性とは何か。本文中で述べられていることをふまえて150字以上200字以内で答えなさい。

問2 本文中で述べられている事例は一見「悪ふざけ」のようにも思えるが、下線部のように、アーティストは過激なパフォーマンスを実行に移すことで、社会に「ユーモアや寛容度」があるかを試している、という。あなたが現代の社会に「ユーモアや寛容度」があるかを試すとしたら、どのようなパフォーマンスを企てますか。その理由も含めて400字以上500字以内で答えなさい。